

「原発要らない! 全国から最前線の声を集めた脱原発情報マガジン」の『NONUKES VOICE』がある。この雑誌を下記のような人たちが賛同、支援している。元京都大学原子炉実験所助教の小出裕章氏は、「『NONUKES VOICE』は原発という明白な立場に立ち、自らの足で歩いた情報を載せてくれる貴重な雑誌である」、ルポライターの鎌田慧氏は、「原発をやめる運動が全国的につながった雑誌です。雑誌で新しい連繋もできました」、大飯原発運転差し止め判決を出した元福井地裁裁判長の樋口英明氏は、「原発がある限り、我々はいつも綱渡りを強いられるのです。大地にしっかりと足をおろすことができる日まで『NONUKES VOICE』を応援しなければならないと思います」と、それぞれ応援している。

『Vol 28』に、福島県郡山市から避難し、現在、原発賠償関西訴訟原告団代表をしている森松明希子氏の「『処理水』『風評』『自主避難』〈言い換え話法〉— 言論を手放さない」の報告を、痛みを感じつつ読んだ。彼女は初めにプラトンの「言葉を正しく使わないことは、それ自体として誤りであるだけではなく、何らかの悪害を我々の魂に及ぼす」という言葉を引用している。それは、国やメディアが勝手に作り出した言葉によって、とんでもない誤解や差別を生み出し、魂を傷つけていると言いたい訳である。

森松氏は強制避難区域外から、子ども二人を連れて、マスメディアが「自主避難」と名付けた避難をした。すると、反射的に叩かれ、言論の場を奪われ、バッシングを受けた。彼女からすれば、「自力避難」で、国連の指導原則によれば「国内避難民」に該当する。国策として原発を進めてきた国や東電が「自主避難」と「強制避難」とに分けて線引きしたために差別と分断が起こった。これは、責任を問われる側が被害を矮小化し、賠償を少なく済ませ、責任逃れをするための常套手段であると、彼女は批判している。

放射能汚染された土を除けるためにかき集めた「汚染土」を、テレビや新聞などのマスメディアは汚染が取り除かれたかのような「除染土」と言っている。森松氏は「『除染』で発生した土は紛れもなく『汚染土』です」と言っている。「汚染水」も「処理水」「トリチウム処理水」などと言い換えている。森松氏は「放射性物質が取り除けていない水はやはり端的に言う『汚染水』なのです」と、当然のことを言っている。経産省は、汚染水のことを「処理途上水」と定義し始めたという。「中間貯蔵施設」という言葉はさんざん聞かされた。核のゴミを最終的に引き受ける候補地などは地域住民に反対され、決定できないので「中間」という言葉で引き受けさせている。森松氏は「中間」という言葉で、検討中、善処すると見せかけ、世論をミスリードしていると警告している。

事故を「風化」させないと聞く。風化とは形あるものが風雨によって削られてなくなることである。森松氏は、原発事故の被害の全容が一度でも明らかにされたことがあったかと問い、「『風化』する以前に存在するものが認知も認識もされていないのです」と怒っている。「風評」とは根も葉もない噂話であるが、放射能汚染という事実がある。だから、福島県の物を買わないと言うのには、被害を避ける根拠がある。森松氏は下記のように言う。風評被害を打ち消すことは、実害を恐れて買わない一般市民に責任を転嫁することに他ならず、責任を負う側の論理で喧伝されることであって、原発事故の実相を見えなくすることである。また、都合の良い言葉によって、本質から外れた議論に誘導し、それが、「社会通念」のように錯覚させられること危惧する、と。被災して、避難せざるを得なかった森松氏は、作られた言葉によって事故を隠蔽し、責任を曖昧にしていると言い、放射能汚染という事実には蓋をせず、気づいた者から言論し続けることが大切だと訴えている。